

## 「折り合いをつけて暮らす知恵を

～扉よ、開け 大阪の精神病棟への訪問活動より、を聴いて」

古瀬敏（フリーランス研究者／静岡文化芸術大学名誉教授）

精神障害者は治療の対象なのだろうか？

それとも新しい意味でのリハビリテーションの対象なのだろうか？

医者にとって、精神障害者は精神病、紛れもなく「病氣」を病んでいる患者であり、「正しい治療法が見つかるはず」という信念があるように思われ、これまでそれがずっと主流だったようだ。

しかし、「障害」という用語から見ると、「治る」という考え方は、根本的に間違いかもしれないという点に思い至る。

「障害」があることを前提とすると、無理に治療するのではなく、それがあっても社会で生きていけるようにするのがよりよい対応手法であろう。

少なくとも身体障害では「障害」と折り合いをつけて暮らす知恵を身につけるようにしていくのが基本的な選択になっている。

精神障害にあっても同じ選択が基本であると考えれば、病院入院は急性期のみの例外でなければならぬはずだ。

施設収容も同様に安易に行われすぎている。

それと同時に、高齢者の社会的入院を減らすこと、そして住環境が低質過ぎるが故の、高齢者施設への雪崩を打っての入所を減らすこととも同時に目指すべきであろう。

わが国の高齢化の状況を考えれば、それらはそもそも達成不可能なことだと早く気がつくべきだ。